

Nara Women's University

平安の価値観: 『源氏物語』 葵の巻「車争い」の場面 をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学日本アジア言語文化学会 公開日: 2020-05-19 キーワード (Ja): 『源氏物語』, 『枕草子』, 車争い キーワード (En): 作成者: 礪波,美和子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/5416

平安の価値観

——『源氏物語』葵の巻「車争い」の場面をめぐって——

礪波美和子

はじめに

約三十年前の大学四回生の時、千本英史先生の修士課程（現博士前期課程）の中古文学演習で、『源氏物語』「あふひ」の巻が取り上げられた。訳も注もない尾州家河内本のテキストだ^①。最初の担当者波多野真理子氏の発表に倣い、池田龜鑑『源氏物語大成・校異篇』を元に、その他の河内本・青表紙本・別本と比較し、紫明抄・河海抄・花鳥余情・弄花抄・細流抄・孟津抄・岷江入楚・湖月抄などの古注釈の説を比較し、賀茂真淵の源氏物語新釈、本居宣長の玉の小櫛、小学館の日本古典文学全集の訳や注を参考に、各担当者が気になる用語などを語釈と称して、『源氏物語』中の用例や年代の近い物語や日記・随筆からの用例を資料に挙げ、検討していくという演習だった。

担当箇所に車争いの場面があり、演習時は、尾州家本で「さう人はすくなきところのひますこしあるを・たゝしめにしめて」^雑となつてゐるところが、青表紙本では「さふくゝの人名きひまをおもひさためて」となつてゐること、「ただ」と「しめ」の語釈、しめの用例に「注連」「占め」があることなどを検討するに留まった。「しめにしめて」と重ねていく状態が、「下品な言い方」とのコメントをいただいた。以来、ずっとこの場面が引っかかってきた。

一

『源氏物語』葵の巻^②に、葵祭り見物における六条御息所の車と葵の上の従者との車争いの記述がある。まず、

大殿には、かやうの御歩きもさをさしたまはぬに、御

心地さへなやましなければ思しかげざりけるを

と、源氏の正妻である葵の上が、普段から物見もあまりなさらない上、懐妊していてご気分もすぐれないため、見物に行くつもりがなかったことが記される。そして、

若き人々、「いでや、おのがどちひき忍びて見はべらむこそはえなかるべけれ。おおよそ人だに、今日の物見には、大將殿をこそは、あやしき山がつかへ見たてまつらんとすなれ。遠き国々より妻子をひき具しつとも参で来なるを、御覽せぬはいとあまりもはべるかな」と言ふを、

と、若い女房たちが、正妻である葵の上のお供としてではなく、自分たちだけでひっそりと見物しても栄えがないであろう。縁のない人でも、源氏の晴れ姿を見ようと遠い国々からやってくるというのに、正妻である葵の上が見物されないのは、あんまりだと歎いた。それを聞いた葵の上の母が、

大宮聞こしめして、「御心地もよろしき隙なり。さぶらふ人々もさうざうしげなめり」とて、にはかにめぐらし仰せたまひて見たまふ。

と、ご気分もまあまあなようで、お付きの人々もつまらなそうにしているようだからと勧め、急に物見に行くことになったこ

とが記される。

日たけゆきて、儀式もわざとならぬさまに出でたまへり。隙もなう立ちわたりたるに、よそほしうひきつづきて立ちわづらふ。

と、日が高くなつてからお出かけになったため、既に見物の車がところ狭しと立ち並んでいるので、立ち往生したことが記される。そこで、

よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めてみなさし退けさずの中に、網代のすこし馴れたるが、下簾のさまざまよしばめるに、いたうひき入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、物の色いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり。

と、自分の高い女性の乗っている車がたくさん出ているので、その中で雑人どものいない場所を目当てにして、すべて立ち退かせていると、その中に、お忍びの様子のはっきりと分かる車が二両あったことが記される。

「これは、さらにさやうにさし退けなどすべき御車にもあらざ」と、口強くて手触れさせず。いづ方にも、若き者ども酔ひすぎたち騒ぎたるほどのことはえしたためあへず。

おとなおとなしき御前の人々は、「かくな」など言へど、えとどめあへず。

と記される。先に、お忍びの様子の二両の車は、下簾の様など趣があり、ほの見える袖口などの色合いもきれいであったことが記されていた。ここでは、供人が「これは、けっして、そんなふうに立ち退かせなどできるお車ではない」と強く主張している。しかし、双方の若い人たちが酔いすぎたこともあり、分別ある人々が止めようとしても止められない。

「これは、さらにさやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」という供人の主張はどういう意味を持つのであろうか。

二

見物に出かけることが決まる前に女房達は、「いでや、おのがどちひき忍びて見はべらむこそはえなかるべけれ」と自分達だけでひっそりと見物しても、栄えがないであろうといている。そして、葵の上の一行は、後からやってきているのに、雑人どものいない場所を目当てにして、女房車をすべて立ち退かせている。これらは、現代の感覚で読むと、あまりに非道な行いである。

しかし、清少納言の『枕草子』の「よろづの事よりも」に、よろづの事よりも、わびしげなる車に装束わらくて物見る人、いとどかし。説経などはいとよし、罪うしなふ事なれば。それだになほあながちなるさまにては見苦しきに、まして祭などは、見でありぬべし。下簾なくて、白き単衣の袖などうちたれてあめりかし。ただその日の料と思ひて、車の簾もしたてて、いとくちをしうはあらじと出でたるに、まさる車など見つけては、なにしにとおぼゆるものを、まいていかばかりなる心にて、さて見るらむ。

という記述がある。みすばらしい車に、みっともない装束を着て見物する人は、どうしてそんなことをするのかと非難したい気持ちになるという。説経を聞く場合はまだしも、祭り見物の場合、そんな格好で見るとぐらいなら、見物しない方がましだと述べる。祭のために車の簾も新調し、これなら残念な気持ちになることもあるまいと出かけたのに、自分のものより優れた車を見つけたら、何しに出てきたのだらうと感ぜられる。まして、みすばらしい車の主はどのような気持ちで見るのであろうかと述べている。

同じ「よろづの事よりも」に、

神輿のわたらせたまへば、轎ながえどもある限りうちおろし

て、過ぎさせたまひぬれば、まどひあぐるもをかし。その前に立つる車は、いみじう制するを、「などて立つまじき」

とて、強いて立つれば、言ひわづらひて、消息などするこそ、をかしけれ。所もなく立ち重なりたるに、よき所の御車、人だまひ、引きつづきておほく来るを、いづこに立た

むとすらむと見るほどに、御前どもただ下りに下りて、立てる車どもを、ただのけにのけさせて、人だまひまで立てつづかせつるこそ、いとめでたけれ。

と、自分の前に立つている車は、そんな所に立てるなとひどく止めるのに対して、「どうして立ててはいけないのか」と言つて強引に立てるので、車の主人に申し入れなどをすることを、「をかしけれ」と評している。つまり、風情があると言っているのだ。さらに、まさに『源氏物語』の葵の巻の時のように、空いた場所もなく車が重ねて立ててあるところに、高貴な方の御車がお供の車と引き続いてたくさん来るのを、どこに立てようとするのだろうかと見ていると、以前から立っている車有無を言わず退けさせ、供の女房が乗る車まで立て続けさせたことを、「いとめでたけれ」と評している。つまり、とてもす

ばらしいと褒めているのだ。この文に続けて、

追ひ下げさせつる車どもの、牛かけて、所ある方にゆるがし行くこそ、いとわびしけれ。きらきらしくよきなどを

ば、いとさしも押しひしがず。いと清げなれど、またひなび、あやしき下衆など絶えず呼び寄せ、出だしすゑなどしたるもあるぞかし。

と記される。目を転じて、追い払われた車が、外してあった牛をかけて、場所が空いている方へ揺るがして行くのは、「いとわびしげ」だという。つまり、ひどくみじめに見えると言っている。この時、きらきらと輝いている良い車などは、そんなふうに押しつぶすことはしないと述べており、祭りの見物にきらきらした装いで来ていない場合、追い払われても当然と考えていたことが窺える。最後に、たいそうきれいだけれど、田舎じみて、見苦しい身分の低いものを絶えず呼び寄せ、行列の見やすい所に出しておいたりする車もあるよと非難している。

現代の感覚だと、行列の順番を無視して横入りする行為は、「すさまじ」と評されて然るべきと思われるのだが、そうではなく、高貴な人物の車が後から来ても良い場所を奪い取ることを当然のことと捉えていることがわかる。そして、「きらきら

しくよきなどをば、いとさしも押ししひしがず」とあるように、祭り見物にふさわしい仕立てで来ている車を押ししけるようなことはしないのだと述べている。

『枕草子』の跋文にあたる「この草子、目に見え心に思ふ事を」で清少納言は、

げに、そもことわり、人のにくむをよしと言ひ、ほむるをもあしと言ふ人は、心のほどこそおしはからるれ。ただ、人に見えけむぞねたき。

と、自分のことを、他の人と異なる意見を言う人と述べている。これによると、祭り見物の車に関する見方も、清少納言独自のものと考えられるかもしれない。

しかし、『栄花物語』の巻第三十六「根あはせ」に、

祭には、ひきつづき物御覧するもいとめでたし。女房車乗りこぼれて、ことなりて所もなきに、よそほしく華やかにて、もとよりある車どもおし消ちて、立ち並び御覧する、
清少納言が言ひたるやうにめでたしと見ゆ。

という記述がある。「美々しく華やかに飾り立て、はじめからとめてあった車をおしのけて、立ち並んでご覧になる様子は、清少納言が言ったように豪華な見ものである」と述べており、

清少納言に同調している。

第一章で引用したように『源氏物語』葵の巻で、供人が「これは、さらにさやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」と強く主張しても聞き入れられなかった背景には、「ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車」と、お忍びの様子がはっきりと分かる車であったことがあげられる。

六条御息所の供人は、自分達の仕える主人である六条御息所は、立ち退かされるような身分の低い者ではないのだと主張している。しかし、葵の上の供人は、「雑々の人なき隙を思ひ定めてみなさし退けさする」、つまり雑人どもがいらないのを目当てにして立ち退かせている。ここに食い違いが生じている。

尾州家河内本では、この箇所、「さう人は雑すくなきところのひますこしあるを・たゝしめにしめて・みなさしのけさする中」となっており、雑人は少ない所の隙が少しあるのを、ただ占領して、皆立ち退かせたととなっている。

『枕草子』「見物は」に、

見物は 臨時の祭。行幸。祭のかへさ。御賀茂詣で。

(略) 行幸はめでたきものの、君達車などの好まじう乗りこぼれて、上下走らせなどするがなきぞ、くちをしき。さ

やうなる車のおしわけて立ちなどするこそ、心ときめきはずれ。

と記される。行幸はめでたいけれど、君達が乗りこぼれる車がないのが口惜しい。君達が乗りこぼれている車が押し分けて立ちなどするのが、心ときめくのだと評している。

『枕草子』「心ゆくもの」に、

物見のかへさに、乗りこぼれて、をのこどもいとおほく、牛よくやる者の、車走らせたる。

と、物見の帰り道に、牛車から乗りこぼれ、男達が大勢付き添って、牛を上手に走らせているのが、気持ちのよいものとして上げられている。

『枕草子』「関白殿、二月二十一日に、法興院の」には、

みな乗り果てぬれば、引き出でて、二条の大路に榻にかけ、物見る車のやうに立てならべたる、いとをかし。人もさ見たらむかした、心ときめきせらる。

とあり、物見車のように立て並べたことをたいへんおもしろいと評し、沿道の人も物見車のようにだと見ているであろうと、心ときめくと述べている。

『狭衣物語』卷三には、

隨身、小舎人、雑色の姿、馬、鞍、舎人、その夜の飾りを、いかでめでたうめずらしきさまに、人に優れんと思し営むをばさるものにて、さるべき宮々、殿たち、また、少しも人数に立ち上がりたる所々、物見たまふべき出だし車の袖口、童の形姿、履子、葵の飾り、めづらしうと、心を尽したまふ。(略)世の人のこととききありさまに思ふらんしるしに、出だし車の飾りなど、例にはまさりたらんを見よかしたて、やがて候ふ人々、数を引き続くべくも思し掟でける。やむごとなき人は、女別当、官旨など、人々同じと、いま四十人、童八人乗るべき車は、透き通りて、隠れなくあるべきよし、簾も上がりて、我も我もと、心を尽したるに、いかばかりめでたからんずらん。

と記される。『日本国語大辞典』第二版に、

盛儀の際、出だし衣(ぎぬ)の装飾を施して用いる牛車。

また、随行の女房が装束の裾を出だし衣とした牛車。

と説明される出車いだしぐるまに関して、通例よりも華やかなのを見て欲しいと準備し、どれほどずばらしいものになったことであろうかと述べている。

三

『源氏物語』葵の巻の車争いでは、

齋宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。つれなしづくれど、おのづから見知りぬ。「さばかりにては、さな言はせそ。大将殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」など言ふを、その御方の人もまじれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。つひに御車ども立てつづけつれば、副車の奥に押しやられてもの見えぬ。心やましきをばさるものにて、かかるとつれをそれと知られぬが、いみじうねたきこと限りなし。榻などもみな押し折られて、すずなる車の筒にうちかけたれば、またなう人わろく、悔しう何に来つらんと思ふにかひなし。

と、葵の上一行に六条御息所と見表された挙げ句、車を退けられる場面が描かれる。そして、

ものも見て帰らんとしたまへど、通り出でん隙もなきに、「事なりぬ」と言へば、さすがにつらき人の御前渡りの待たるも心弱しや、笹の隈にだにあらねばにや、つれなく

過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。げに、常よりも好みととのへたる車どもの、我も我もと乗りこぼれたる下簾の隙間どもも、さらぬ顔なれど、ほほ笑みつつ後目にとどめたまふもあり。大殿のはしるけれど、まめだちて渡りたまふ。御供の人々うちかしまり心ばへありつつ渡るを、おし消たれたるありさまこよなう思さる。

と記される。行列が始まったことを伝える「事なりぬ」という表現は、『枕草子』『栄花物語』にも出てくる言葉で、祭などが始まったことを見物客がこの言葉を発して伝え、高揚感を表すものである。六条御息所も、「事なりぬ」と聞いて、心弱くも源氏を見たいという気持ちに戻っている。しかし、源氏の行列がやってきた時、六条御息所の前は、気づかず通り過ぎてしまう。例年よりも趣向を凝らした牛車に、我も我もと沢山乗りこんで、袖口などの乗りこぼれているものには、さりげない面持ちで見たりしている。そして、葵の上一行の車ははっきり分かるので、源氏はまじめに振る舞いお通りになる。六条御息所は、「おし消たれたるありさまこよなう思さる」と、無視されてしまった自分の有様を、格段の差があると思わずにはいられない。有田祐子氏は「車争い―『落窪物語』と『源氏物語』の間で―」

において、

外の様子を窺うより他にない『落窪物語』でさえ、後に憤りの言葉を発している。だが、『源氏物語』では、散々に争ひ横暴なことをされたにもかかわらず、「心やまし」を「さるものにて」として、それよりも「かかるやつれをそれと知られ」たことを、「ねたし」と思い、また、「いみじう」や「限りなし」としているのである。また、これ以後も、憤りの言葉が発せられていないことにも注目され、と述べている。

東原伸明氏は「車争い前後・六条御息所の〈語り〉・〈言説〉・〈喩〉—忍び所の愛妾たちと〈喩〉—擬きとしての源典侍物語—」⁸⁾において、

最愛の男、光源氏の晴れ姿を、身をやつすことでは見ることが叶わないというジレンマから「心やまし」と思わざるをえない彼女なのであり、そのみすばらしい姿を相手もあろうに正妻葵の上一行に見られてしまった。そのことが、「いみじうねたきこと限りなし」なのである。格式からいっても本来互角であるはずなのに……と無念の思いにくれる六条御息所ではあったが、しかし、逆説的に思考を

めぐらせてみると、彼女は身をやつしたからこそ、この場面において語り手として地の文から語ることが可能になっただのではないのか。やつしの効果とでもいうべきだろう。

と述べている。源氏の正妻である葵の上は左大臣と大宮との子であり、故大臣の子であり前東宮の妃で新しく齋宮に卜定された姫宮の生母である六条御息所は、本来の格式では互角であるはずなのに、格段の差が生じたことを意識せずにはいられない。

源氏は葵の上と御息所の車争いを聞いた場面で、「御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思しうむじにけん」と、人柄がこちらが恥じ入りたいくらいいたしなみ深くいらっしやるものを、どんなにかいやな思いをなされたであろうと御息所のことを心配なさる。その後、

御息所は、ものを思し乱ること年ごろよりも多く添ひにけり。つらき方に思ひはてたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならんことと思す。さりとて立ちとまるべく思しなるには、かくこよなきさまにみな思ひくたすべかめるも安からず、釣する海人のうけなれや、と起き臥し思しわづらふけにや、御心地も浮きたるやうに思されて、なやましようした

まふ。大将殿には、下りたまはむことを、もて離れて、あるまじきことなども妨げきこえたまはず、「数ならぬ身を見まうく思し棄てむもことわりなれど、今は、なほいふかひなきにても、御覽じはてむや浅からぬにはあらん」と聞こえかかづらひたまへば、定めかねたまへる御心もや慰むと立ち出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとどよろづいとうく思し入れたり。

おわり

尾州家河内本の所蔵者である徳川義親氏は、『尾州家河内本源氏物語問題』^⑧の緒言において、

河内本は、河海抄中にも記してある如く、凡そ八本を以て源光行・親行が校訂したものであるが、(略)実は八本以上を用ひて居る。(略)謂はゞ河内本は一種の混合本文とも考へられる。(略)要するに、河内本は河内本として、長い年月の間生命を保ち、存在の意義を持つて来て居る。されば、これ既に河内本としての源氏物語である。其の儘一つの作品として存続さすべきである。青表紙本亦然りて

平安の価値観

ある。それ等を相互に校訂する事は、却つて本文の混同を、殊更助長する結果を招く。

と述べ、問題の著述を山岸徳平氏に委嘱した旨、記している。山岸徳平氏は、

源氏物語の伝本も亦、平安末期には既に多少の異同を生じて居た。鎌倉初期に於ける源氏物語研究の大家、河内守源光行・親行父子は、其れ等の異同を校訂する為に最も努力した人であつた。幾多の努力と年月とを費した後、其の校訂は完了した。けれども其の校訂本文は、言はゞ混合写本(Conflated m.s.s.)の傾向を有するものであつた。

(第二章)

要するに尾州家本は、書写の時代も、来歴及び古筆としての点も、又完本として存する点も、共に河内本として最も重要なものであらう。けれども、本文としては、既に述べた如く、河内本は謂はゞ混合写本(Conflated m. m.s.s. 又は *Mish Codices*)とも見らるべきものである。光行・親行の努力が、あらゆる点に大きくなれば、それに正比例して、其処に生じた本文は源氏物語の原本文(Ur-text)から遠ざかつたものとなるに相違ない。(第十五章)

と述べている。

三十年前の演習のノートを開くと、今までの研究は原書形体にもどすことをめざしていたが、写された一つ一つの本もっている世界、受容史が大切に、諸本を一冊の世界として読むことなどを書き留めている。

葵の上の供人が、雑人のいないのを目当てにして当然の如く立ち退かせていることに違和感を抱き、なぜだろうと思いつつ続けた中、『枕草子』を全段読み解く機会を得た。第二章で引用した「よろづの事よりも」に、『源氏物語』葵の巻と同じような行為に対し「いとめでたけれ」と評していることを知った。さらに、『栄花物語』でも、立ち退かせた後に立ち並べる行為を「清少納言が言ひたるやうにめでたしと見ゆ」と賞賛していた。これらは、現代の感覚と違う平安の価値観を表すものと考えた。

注

- (1) 『尾州家河内本源氏物語 第一巻』武蔵野書院、一九七七年。
 (2) 新編日本古典文学全集21『源氏物語②』小学館、一九九五年。引用のふりがなは一部にとどめた。訳は私に行った。用例検索にジャパンナレッジを利用した。以下、『源氏物語』

本文の引用は、特に断らない限りこれによる。

- (3) 新編日本古典文学全集18『枕草子』小学館、一九九七年。以下、『枕草子』の本文の引用はこれによる。
 (4) 新編日本古典文学全集33『栄花物語③』小学館、一九九八年。
 (5) 新編日本古典文学全集30『狭衣物語②』小学館、二〇〇一年。
 (6) 日本国語大辞典第二版①、小学館、二〇〇〇年。
 (7) 有田祐子氏「車争い」『成蹊国文』三十九号、成蹊大学文学部日本文学科、二〇〇六年三月。
 (8) 東原伸明氏「車争い前後・六条御息所の〈語り〉・〈言説〉・〈喩〉」『国語と国文学』東京大学国語国文学会、一九九八年十月。
 (9) 山岸徳平著『尾州家河内本源氏物語問題』尾張徳川黎明会、一九三五年。貴重本刊行会から一九七七年に誤植を正し複製。引用に際し旧字体を新字体に改めた。

——と なみ みわこ・大和大学教授